山岡荘八

徳川家康

3

朝露の巻

徳川家康（とくがわいえやす） 3 朝霧の巻
山岡荘八（やまおかそうはち）

昭和49年1月15日第1刷発行
昭和58年2月5日第32刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03）945 1111（大代表）
振替　東京 8 3930
デザイン　亀倉雄策・菊地信義
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　大日本印刷株式会社
製　本　株式会社国宝社

© Wakako Fujino 1974

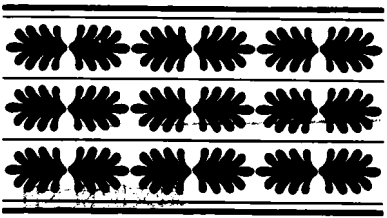
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131203-0 (3)

徳川家康 3 朝露の巻

山岡荘八



講談社

目次

諫死　七
雌伏の虎　二六
狂い桜　五四
初恋　八一
忍従無限　一〇一
風雲　一一五
歩速の諧調　一二五
薄陽　一五二
不如帰　一七二
信長構図　一九一
帰雁の宿　二〇八
闌鶯の城　二三七
乱世の相　二四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

水魚相会う　二六六
風雲うごく　二八五
流　星　三〇五
梅雨の道　三二二
弦月の声　三四二
雲を呼ぶ者　三六七
桶狭間前奏　三八八
龍　虎　四〇七
疾風の音　四二六

今川氏・斎藤氏系譜　四五三
桶狭間の合戦参考図　四五四

挿絵　木下二介

徳川家康

3 朝露の巻

諫死

一

信秀の葬儀はとにかく終った。

が、それで事が済んだのではなかった。柴田権六はその翌日からしきりに一族古老の間を往来して葬儀の日の信長の行為を新たな攻撃の目標にしてゆくらしかった。

むろん権六や右衛門に私心があってのことではない。どこまでも織田家の将来を考えて、信長では家をつぶすとそれを案じているのである。

甲斐の武田家では家の大切さから、父の信虎を子の信玄と婿の今川義元とで、駿府へだまして幽閉している例すらある。

おそらく信長は信虎以上の暴将になるであろうと、権六も右衛門も林佐渡も信じている。したがって彼らの攻撃は鋭かった。どこまでも、自分たちこそ「忠臣――」と自信しているからである。

この分では恐らく初七日の法要のあとで、正式に信長の隠居が家中の議題にのぼらずには済むまい。

三月九日の薄暮であった。
翌日の法要の打合せを済ませたあとで、平手政秀は、万松寺の方丈に大雲和尚をおとずれた。
和尚は政秀を見ると笑いながら、
「お顔のいろがすぐれぬが、殿のことでご心痛かな？」
向うから先にたずねた。
「いかにも、見破られてござる」
和尚はうなずきながら、自分の手で茶をいれて政秀にすすめた。
「わしの眼から見ると、ご心痛の時期はすでに過ぎたと思われるが……」
政秀は茶をすすりながら、
「と、いわれると、和尚もやはりご家督は信行さまと？」
和尚はかすかに首を振った。
「器が違うようじゃの。上総介さまとは」
政秀の眼はひたと和尚の額にすわった。
「見どころありと仰せられるか！」
「さすがは、政秀どのお見立てほどあっての。しかしこの殿は、世間の小さな桝でははかれますまい」
「何といわれる？　大きな器と和尚もごろうぜられるか」
和尚はこんどはうなずく代りに叱るような口調になった。
「今更迷うは不忠でござろう」

「誰に？」
「亡くなられた万松院さまに」
政秀は息をのんだ。ここにも一人味方があった……と思うと、熱いものが胸にこみあげ、とみには言葉も出なかった。
「政秀どの」
「はい」
「上総介さまは、理外の理を見てござるぞ」
「理外の理とは？」
「事々無礙の法界へすでに片足かけてござる。父の位牌に香を投じたあの気鋒、あの気鋒こそ、一切を認めるがゆえに一切を破壊もする、大勇の窓でござるぞ……」
そういってからまた微笑を頬にきざんで、
「それだけに、輔佐する者も生命がけでなければならん。輔佐する者が遅れては、上総介さま、さぞや駆けにくかろう。おわかりかな」
平手政秀はハッと心に思いあたることがあった。
「ご教示かたじけない」
丁寧にあいさつして屋敷に帰ると、彼は紙と硯を机上に並べて、その前にひっそりと坐りだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

二

「――輔佐する者が遅れては上総介さま、さぞや駆けにくかろう」
そういった大雲和尚の言葉が、平手政秀の心へダニのように食い入っている。
「――輔佐する者も生命がけでなければならぬ」といったし、
「――今更迷うは万松院さまに不忠であろう」ともいった。
大雲和尚は俗縁では信秀の伯父であった。その動作、言葉は柔かだったが、内には信秀以上の鋭い気魄をかくしていて、今川義元に対する雪斎の位置に似ていた。
雪斎が時には陣頭に立って義元をたすけたのと反対に、大雲和尚は、裏から信秀の信仰、思想を培うに役立った。
去る年の皇居の修復献金や、伊勢、熱田両神宮への寄進など、信秀が最初に相談するのは大雲和尚であった。
したがって戦術戦略から行政の機微に至るまで、信秀、政秀、和尚の三人でよく語りあった過去を持っている。
その和尚から、受取り方によれば、ずいぶん皮肉な喝棒を食わせられたことになる。
信長が駆けにくかろうとは、何という容赦ない言葉であろうか。
「――おぬしの育てあげた信長は、すでにおぬしではわからぬ世界まで伸びているぞ」
そういわれたと同じ意味をふくんでいる。
と、いって政秀はそれをただの皮肉とは受取らなかった。

和尚の言葉の底に十分に信長をみとめた上での激励があるからだった。
政秀は机の前に坐ったまま、しばらくじっと眼を閉じて動かなかった。
「父上、あかりを……」
三男の弘秀がやって来て、そっと燭台をおいたが、政秀は応えもしなかった。
書見しては考えこむ父の癖を知っている弘秀が、そっと足音をころして出てゆこうとすると、
「甚左――」と、政秀は呼びとめた。
「はい」
「おぬしいまの殿をどう思う？」
「はい……」と、いって弘秀は少し首をかしげてから、
「ちと脱線がすぎるかと存じまする」
「うむ」政秀はしずかな眼でうなずいて、
「五郎右衛はいるか、五郎右衛を呼べ」
と、やさしくいった。五郎右衛門は弘秀の兄、政秀の二男であった。
弘秀が出てゆくと、入れ違いに五郎右衛門が入って来た。
「父上、お呼びでござりますそうな」
「うむ。ちと訊きたいことがあってな。おぬしはいまの殿をどう思うぞ」
「どう思うとは？」
「明君か暗君かじゃ」
「明君……とは、申されまいかと……あのご葬儀の日のことを思えば」

政秀はまたうなずいた。
「よろしい。それが訊いてみたかったのだ。監物はいるであろう。これへと申せ」
監物は政秀の長男だった。この長男は信長をひどく恐れている。彼の持っている荒馬を信長が所望したとき断って、そのあとで差上げましょうと申出て、
「いらぬわ。たわけめ」
信長にひどく叱られてからこの方だった。
やがてその長男が入って来て、政秀のわきに坐った。

三

「監物――」と、平手政秀は、前より一層低い声でいった。
「おぬしはいまの殿をどう思うぞ」
「どう思うとは？」
「うわべはいかにも荒々しい。が、心のうちに滴るような情愛をかくしている……と、父は思うが、おぬしの見た眼は？」
監物は答えなかった。答える代りに、そうしたことを改めて訊ねる父の心をいぶかしむまなざしだった。
「やさしいお方とは思えぬか？」
「やさしい方かも知れませぬ。が、いままでに、そのやさしさが出ているとは思われませぬ」
「うーむ」と、政秀はため息して、

「もし内にやさしさがあるのなら、それを出させて家中の和をはかる……それがわれらの勤めじゃの」
「なぜそのようなことを改めて仰せられまするか」
「おぬしに、そうしたご奉公の自信の有無を訊きたいのじゃ」
「父上！　監物はまだまだ未熟者でござりまする。その自信はござりませぬ」
政秀はこくりとうなずいて、下ってよいと手を振った。
監物はあきらかに信長に反感を持っている。わが三人の子――それにも大雲和尚のいうような……自分の希っているような、信長の気禀は理解させ得なかった。
一人になると、またしばらく政秀は眼を閉じたまま深沈と考えこんだ。
窓の外はだんだん暗くなってゆき、灯のゆれるたびに政秀の影もゆれた。
「万松院さま……」
しばらくして政秀の口を漏れた言葉は亡き殿、信秀への呼びかけだった。
「この政秀めは、あなた様の家臣の中で、いちばんあなた様に信じられました……」
そういうと政秀の閉じたまぶたがしっとりと濡れだした。
「口惜しゅうござりまする……そのご信頼にこたえられぬのが口惜しゅうござりまする」
そしてそのあとは、すぐ眼先に信秀がいるかのような哀切なひとり言。
「わしは、どこまでも吉法師さまと駆けくらべをする。吉法師さま、尾張一国の太守になられたら尾張の師傅、近畿全体を手に収められたら、その傅役と……しかし、その自負もひとり相撲だったような……いいえ、政秀は悲しくて泣いているのではござりませぬ。嬉しさと、申訳なさ

とで……」

ことりと、どこかで鼠がうごいた。

政秀にはそのかすかな音が信秀の霊の反応としか思えなかった。

「おお、聞いていて下さるわ……」

音した天井の隅を見上げて、彼はまた子供のようにボロボロと涙をおとした。

「殿！　どうやら政秀は吉法師さまに駆けぬかれました。もはや、この政秀では、忠義が忠義にならぬ位置まで……足手まといになるところまで……しかし殿！　政秀もあなたさまに見出された吉法師さまのお守り……このままは引下りませぬ！　知恵の足りぬはお詫びして、政秀も武士のはしくれ、必ず一分は貫きまする。それで何卒お許しを……お許しを……殿！」

四

政秀はいつか畳に両手を突いて肩をふるわして泣いていた。

ひとりごちていたように、悲しい涙ではなかった。むろん歓びのそれでもないが、どこかに春雨の甘えをふくんだ、感傷らしいものもあった。

（殿は亡くなられた……）

その死が、あまり不意だったので、人生のはかなさが払いきれない強さで彼をつつんでいた。

信秀は死んだ……と、考えることが、すぐその裏で、まもなく自分も死ぬであろうという連想へ「寂び」をつないでゆくのである。

数多くの戦場を往来して、いままで生きのびて来たのがふしぎに思えたり、何のために生れて

来たかの反問が改めて甦って来たりした。

そしてそのいずれもが、政秀の一つの理性に帰納するのは、やはり政秀の誠実さのせいであった。

信秀や自分らが、去年の葉として散りうせても、少しもその木の枯死を意味しない。今年は今年でまた見事に葉は繁ろう。いや、それは古い葉の腐蝕を肥料にして、いっそう幹をのばし枝を張った生命の樹に、数多く見事に繁りを見せてゆくに違いない。信長も権六もその意味では今年の葉――と、政秀は思った。

政秀自身も、若いころには信秀にあきたらなかった。こんな主君のもとでは、生涯うだつはあがらぬぞと、冷たい計算をした日もあった。

それがいつからか信秀に引きつけられ、ついにはよろこんで心服して今日におよんでいる。

信長にしても同じであろう。柴田権六ずれを心服させる力がなくて何ができよう！

（それは自然に任すがよい……）

といってそれをどこまでも消極的な諦観とは思いたくなかった。

「――吉法師はおぬしに頼むぞ！」

そういわれた信秀に、

「――引受けました」

と、答えたのだ。その誓いだけは、この身のあらん限り、つき貫かずにはおけない武士の意地であった。

泣くだけ泣くと政秀は顔をあげた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton